

## V 地域連携活動経費による活動報告

### 1. 松本大学・松商短期大学部「キッズプログラミング教室」

総合経営学部総合経営学科 室谷 心

#### (1) 活動計画

地域の小中学生を対象としたプログラミング教室を開催する。本取り組みは、教室の運営を通して、地域の子供たちのプログラミングをはじめとする情報技術への関心を高め、将来は本地域においてソフトウェアやものづくりの分野で活躍する人材に育つことを期待するものである。

本学の施設および松本市や安曇野市の学習施設にて、本学学生が子供たちにプログラミングを教える「キッズプログラミング教室」を開催し、プログラミング知識の普及と情報教育の底辺の拡大を目指すとともに、教育活動を通じて学生たち自身のコミュニケーション力やICT活用能力の向上を図る。

予定している教室の時期は次の通り。

「キッズプログラミング教室」

7月中旬 「モノづくりフェア」にて実施

「親子プログラミング教室」

10月中旬、12月中旬 安曇野市役所会議室にて実施

今年度の実績は本学を会場とするモノづくりフェアの開催が見合わせになったために、安曇野市のみで延べ4日間であった。

各教室では10名～20名の参加者を募り、応募者数に応じて1日複数回教室を開講する。また、教室の開催に合わせて様々な機器やプログラム作品を展示して体験できるブースも設け、来場者にプログラミングやICT技術の魅力を伝える。

本申請の予算には、教室や体験ブースで使用する機材の準備に係る経費と消耗品費、教材開発に係る費用、活動に参加する学生へのアルバイト代金に係る費用が含まれる。学生には、当日の活動に加えて、教材の開発並びに機器の定期的なメンテナンス(Windowsのアップデート作業)を依頼する。なお、今年度同様に学内のパソコンが利用できれば賃借料は不要となる。

また、例年同様に安曇野市からの受託事業となれば、それが活動の主たる原資となる。

#### ・成果発表の予定

本学事例報告研究会にて発表

#### ・共同活動者がいる場合その役割

矢野口 聡(松商短期大学部経営情報学科)

プログラミング教室実施に向けた教材開発及び教室運営、学生の指導

#### (2) 活動内容

安曇野市役所4階会議室で10月21日(土)、22日(日)、28日(土)、29日(日)の4日間にわたって、安曇野市教育委員会「松大生と学ぶ親子プログラミング教室」を開催した。4日間はいずれも午前、午後それぞれ2クラスで参加者は4日間で102組(回収アンケート枚数)の親子であった。

この教室は2017年から毎年開催しており、今年で7回目であった。総合経営学部室谷ゼミ3年生、松商短期大学部矢野口ゼミ2年生が、それぞれ担当クラスの教材開発(Scratchによるゲーム制作)と教室運営を行った。利用パソコンのメンテナンスやWi-Fi環境も含めた会場設営も学生たちが行った。

参加者の約半数が2年生以下の低学年生で、兄弟での参加や保護者2人が付き添う熱心なご家庭も目立った。

今年度は、他の子ども参加イベントを開催する機会がなく、残念ながら安曇野市教育委員会「松大生と学ぶ親子プログラミング教室」の実施のみであった。



### (3) 成果

「松大生と学ぶ親子プログラミング教室」では、松商短期大学部矢野口ゼミと松本大学総合経営学部室谷ゼミの学生たちが先生役となり、それぞれに工夫を凝らした教材で参加親子にプログラミングを教え、「どうやったら自分たちの考えた“教えたこと”をわかってもらえるのか」を考え、工夫を凝らしながら講座を進めることを通して、情報技術に対する深い理解の実現を目指した学修を実践した。

いずれのクラスも、休憩なしの1時間半であったが飽きたりすることなく、参加児童全員が一人前にプログラムの作成を完了し、終了目標地点までの参加者の学修を終了していた。終了後アンケートによれば、講座内容は受講者に好評であった。

### (4) 共同活動者

矢野口聡(松商短期大学部経営情報学科)

### (5) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

大学webニュースに掲載。

## 2. 「映画のまち あげつち」ブランド化推進プロジェクト

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 向井 健

### (1) 活動計画

#### 〈課題意識〉

松本電気館、松本エンギザ、テアトル銀映…。かつての松本市の中心市街地にある上土町(現在の松本市大手4丁目付近)には、数多くの映画館が立ち並んでいた。しかし、2000年代後半、相次ぐ映画館の閉鎖に伴い、現在では、このまちに映画館はなくなり、旧松本電気館の建物など、「映画のまち」としての痕跡が残るのみである。ところが、幼少期から松本に在住してきた30代以上の地元住民にとって「映画のまち」としての上土町に対する印象は、けして色褪せてはいない。かつて若き日に映画を見た日の思い出とともに、今もなお、多くのひとたちの記憶の中に生き続けている。さらには、近年では、「流浪の月」「太

陽とボレロ」など、新たに上土町が舞台となった映画作品が数多く上映され、新たな映画ロケ地にもなっている。

このような現状を踏まえ、本プロジェクトでは、映画を通して、地域の魅力向上とブランド化を推進することを目的とした取り組みである。

#### 〈進め方〉

本プロジェクトでは、以下の点について、2023年度のプロジェクトを推進することとする。

#### ①旧松本電気館の映画ポスターの整理と活用

旧松本電気館には、数千枚を超える映画ポスターが残されており、その整理とその活用が課題とされてきた。2022年度に映画ポスターの整理とデータベース化に着手し、徐々に残された映画ポスターから、かつての旧松本電気館にて上映されてきた映画内容の一端が浮かび上がってきたところである。これまでの成果を土台としながら、単に「保存」だけにとどまらず、それを活用し、上土町を「映画のまち」としてのブランディング化に寄与しうる方策を模索することが重要である。そこで本年度においては、映画ポスターを地域の魅力発信のツールとしてまちづくりに活用する取組み（「各店舗への映画ポスター掲示」や「あげつち映画ポスター展」の開催など）を打ち出し、魅力向上へとつなげていくこととしたい。

#### ②映画に関わるまちづくり学習会の開催

2022年度は松本大学地域考房「ゆめ」や松本大学平和創造研究会とともに、映画「ひまわり」上映会を開催した。100名を超える来場者があり、皆で映画を見る楽しさを共有する時間となった。そのような活動の成果を踏まえ、映画に関わるまちづくり学習会を開催する。ここでの学習会の内容に関しては、下記の1)～3)としての内容を想定している。

##### 1)映画文化についての理解・共有をはかる学習会

2022年度までに作成した映画ポスターのデータ・ベースを活用していく上でも、映画文化に関する理解を深めていく必要がある。そこで、国内外の映画文化や映画史に関わる理解・共有を図る学習会を開催したい。

##### 2)上土町ゆかりの映画関係者から学ぶ学習会

「映画のまち」としての“まちの記憶”を共有化していく上で、上土において映画文化を支えてきた“人”の存在は欠かすことができない。例えば、映画館の運営を担ってきた経営者、手書きの映画看板を描いてくれていた絵師、映画上映に携わってきた映画技師などに焦点を当て、上土での思い出を振り返り、共有しあうことのできる学習会とする。

##### 3)「映画のまちづくり」の先進事例から学ぶ学習会

全国的な傾向として、シネマコンプレックスの波に押され、人びとに慕われた映画館の多くが閉鎖を余儀なくされている。しかしながら、同時に市民の手によって、映画や映画館を核とした地域再生に取り組む事例もまた存在しており、全国的にみられるところである。このような他地域の先進事例に学び、人的なネットワークを構築し、まちづくりに活かしていくことを目的として、「映画のまちづくり」の先進事例に学ぶ学習会を開催する。

#### ③「映画のまち あげつち」ブランド構築に向けた先進地視察

松本大学では、観光ホスピタリティ学科の教員を中心として、17年の長きにわたって、上土のまちづくりに携わってきた。そうした取り組みの中で、「映画のまち」としての上土のブランド化を支えてくれる先進地との関わりも徐々に構築できてきたところである。例えば、具体的には、山形・鶴岡のまちなかキネマ等の住民の熱意でつくられた映画館関係者、埼玉・深谷のシアターエフ、兵庫・豊岡の豊岡劇場の関係者、映画音楽に詳しい志田一穂氏(ラジオパーソナリティ)などである。現在、上土町では「映画のまち あげつち」のシンボリック存在である旧松本電気館の再生が町の悲願ではあるが、先進地視察(今年度は鶴岡を想定)を通して再生のヒントを得ることとしたい。実施の際にはコロナ感染予防対策には十分配慮をして行うこととする。



#### ④「映画のまち あげつち」のイメージの発信

「映画のまち」のイメージを多様な媒体を使いながら発信していくことである。そのイメージ定着において鍵となるのは、これからの地域づくりの未来を担う若者世代を巻き込む戦略であろう。新しい映画の楽しみ方を含めて学生たちの発想を活かしつつ考えてもらうことで、上土を「映画のまち」としての魅力を多面的に伝える媒体作成に取り組むこととする。

#### 〈期待される効果〉

上土町を「映画のまち」としての側面に光を当てることは、より上土の魅力を鮮明なものにし、これまでの大学と上土町との協働によるまちづくりを発展させることに寄与することができる。またこれらの取り組みが展開することで、上土町としての魅力向上にもつながる。

また本学学生にとっても、映画を切り口として、上土のまちづくりに取り組むことで、楽しみながらも、先進的な地域づくりの事例や実践にふれることができる。

#### 〈成果発表の予定〉

一般を対象としたシンポジウム・公開討論会の実施・上土町関係者を対象とした成果発表会開催

### (2) 活動内容

本プロジェクトを通して取り組んだ活動内容について、下記の通り、報告をする。

#### ①旧松本電気館の映画ポスターの整理と活用

大正時代に建築されて100年以上を経過する歴史ある映画館であった「松本電気館」に収蔵されていた映画ポスター 7000枚以上を掘り起こし、整理・分類、ならびにデータベース化に継続をして取り組んできた。これらは、そのまま放置すれば捨てられるゴミになってしまうものであるが、整理・分類をすることで、地域の貴重な資源になりうるものである。またこれらのポスターは地域において過去に上映されたものであるから、それらを観た人々の記憶を掘り起こしていくことで、これからの地域づくりの資源になりうる。今年度は、ポスターのデータベース化を完成させることができ、ポスターを活用した活動に展開をさせていくことができた。

#### ②映画に関わるまちづくり学習会の開催

映画文化の理解・共有を図り、「上土のまちづくり」につなげていく取り組みを行った。計画当初は「学習会」として考えていたが、もう少し広く捉え、ポスター展を含め、映画について語りあうことのできる場を創造していく企画を実施することとした。

その成果の一つが、「あげつちシネマエンタメ・フェスティバル」(2023年9月2・3日開催、お城下町まちづくり協議会主催)である。このイベントにおいては、ジョン・ウィリアムズの映画音楽に関する志田一穂氏の講演が行われるのにあわせて、「あげつち映画ポスター展」を開催した。ここでは、過去に上映されたポスターの中から



あげつち映画ポスター展の様子

(多世代にわたって観られたと思われる)アニメのポスターを抽出し、ふれあい会館の2階にてポスター展示を行うこととした。これらの映画ポスター展示にあたっては掲示用フレームにポスターを入れて掲示し、不特定多数の方の掲示に耐えうる展示を作り上げることとした。またポスター展においては、ポスターそのもののみならず、上映館で配布されたグッズや飾られていたパネル、看板なども併せて展示をした。さらにはそれぞれの映画には、その映画作品の解説を学生たちが考え、解説文(キャプション)をつけて掲示することができた。

さらには、「上土で映画を楽しむ会」(2023年11月25日開催、地域づくり考房「ゆめ」・上土商店街振興組合主催)は、地域づくり考房「ゆめ」の映画上映等の企画に合わせて、ふれあいホールにおける「上土映



画「思い出ポスター展」を開催した。過去にあげつちで上映したポスターの中から、比較的年代が古い作品や松本にゆかりのある作品、映画上映当時の話題性を有した作品等をポスター展示用に抽出した。さらにはポスター展にあわせて「地域交流懇談会」を開催した。この懇談会にも地域住民の方たちが多く参加をし、昭和の時代の街の姿に思いをはせるとともに、「民衆の娯楽」として存在感を有していた上土の映画館の様子について語り合う機会を設けた。ここでも映画に関わるキャプションや展示するポスターの選出などに関しても、多くの学生たちが企画に参加をし、取り組むことができた。



地域交流懇談会

これらの活動のベースとなったポスター資料のデータベースは、整理をしたファイル・写真とともに、上土商店街振興組合と共有を行い、今後の上土における「映画のまちづくり」においても活用できるようにした。また保管されていた映画ポスターのキャッチフレーズ分析を試みることで、上土において上映された映画の各年代の特徴を析出し、映画データベースの分析を行うことができた。

③「映画のまちづくり」先進地視察については、実施をすることができなかった。引き続き「映画のまちづくり」を発展させていくのにふさわしい事例の収集に努めていくこととしたい。

### (3) 成果

本プロジェクトにおける成果については、下記の諸点が挙げられる。

これまで長年にわたって松本電気館に眠っていた映画ポスターを活用可能な状態にできたことが大きな成果であるといえる。今回のプロジェクトにおいてポスター掲示用フレームも用意することができ、テーマに応じて、映画ポスター展を開催することができるようになったことで、上土からの映画文化の発信に対して大きな前進となったといえる。

またこれらの映画ポスターのデータベース化やポスター展の取り組みをはずみとして、松本電気館内に「上土シネマミュージアム」(<https://retro-agetsuchi.com/>)がオープンしたことも、これまでの活動の成果によるものであるといえるだろう。

その一方で、整理をした映画ポスターならびにデータベースの保管・管理方法については、今後の課題として残されている。現在の所、映画ポスターは、松本電気館内の大ホールにて保管されているが、かならずしも保管状況が良いとはいえない。また今後、映画ポスター展で多数の人がデータベース化した筒の取り扱いを行うことを考えると、整理をしたポスターが散逸してしまわないようにする工夫も急務となってくる。この点については、今後の活動における課題としたい。

### (4) 共同活動者

増尾均(総合経営学部観光ホスピタリティ学科)

### (5) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

- ・新聞報道(「信濃毎日新聞」ならびに「市民タイムス」2023年9月3日付記事)
- ・映画ポスターデータベース 等

## 3. 若者を核とした上土のまちづくりの推進プロジェクト

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 白戸 洋

### (1) 活動計画

上土のまちづくりに向けて上土大正ロマンのまちづくり協議会と連携した本学の取り組みはすでに17年間にわたり展開されてきた。地域振興分野で大学生の貴重な学びのフィールドであるとともに、上土町のまちづくりにも寄与してきた。連携を開始した当時、上土商店街は店舗数が50店舗まで減少し、いわゆる

シャッター商店街としてさびれていたが、現在は80店舗まで商店数が回復している。またまちづくりの拠点として「カフェ」が定着し、映画の街としてのシンボルであった旧松本電気館の再生も具体的に取り組みが開始されている。近年には、来街者も増加し、「流浪の月」や「太陽のボレロ」などの映画のロケ地として選ばれるなど、まちづくりは一定の成果をおさめている。これらは松本大学の学生や教員が関わったこともあるが、1980年代から一貫して継続されてきた上土町の住民や商業者の熱心なまちづくりへの取り組みの成果でもある。上土のまちづくりは、1970年代当時に若手の経営者を中心とした「フロンティ上土」というまちづくり集団によって進められてきた。しかし、これまで50年にわたりまちづくりを牽引してきたリーダーの高齢化が進んでいることを踏まえると、まちづくりを次世代につないでいくことが今後の課題となっている。また上土町が映画のまち、大正ロマンのまちとしてのブランドを確立し、一定の顧客を集めてきたのは、若い時期に映画館やカフェで過ごした人々が上土に対して親近感を持ち、大人になっても来街してくれたことが背景にある。しかし、2008年の上土シネマの閉館によって上土から映画館がなくなって以降、若者の来街は大きく減少しており、上土町のブランドを維持するためには、若者が再び街に訪れるまちづくりが必要である。

そこで2023年度は、これまでのまちづくりの取り組みを深化させ、①若者を再び街に呼び戻すまちづくりを推進するとともに、②その取り組みを通じてまちづくりを担う次世代の若手経営者を育て、新たなまちづくり集団を形成することに取り組む。具体的には、高校生や大学生が来街する環境づくりと若手経営者がまちづくりに参画するシステムの構築を図りたい。

①については、これまで「カフェあげつち」を拠点とした高校生や大学生との交流や学習活動をさらに進化させ、そのために高校生や大学生の中心市街地に対するニーズをアンケートなどで把握し、彼らが参加できる学習会や企画、商品開発、イベントなどを実施する。特に本学で進めているデパートサミット事業や高校との地域連携事業を積極的に取り込んでいきたい。また若者の求めるニーズに対応し、上土商店街の各店舗の特徴を活かした若者向けのサービスや企画を検討し試験的なプロジェクトを実施する。例えば音楽やダンスなどで、若者が練習したり、発表する場を提供するなど具体的な取り組みを考えたい。②については、若手経営者が参加しやすくインセンティブがあるテーマや事業を通じてまちづくりへの参画を図っていききたい。現在上土で新規に開業した経営者の多くは、飲食店や美容室などのサービス業が中心で、それぞれの経営に資する具体的な事業を考える必要がある。そこで具体的には昨年度から始まった1日平均で3000～5000人を集客する「松本建築芸術祭」などのイベントにおける誘客のための情報発信やイベントなどを若者と経営者がともに考える事業を実施したい。また「映画ポスターの各店舗への貸出事業」など映画のまちづくりと商店街の活性化を結びつけた事業も若手経営者と協働して実施することも検討したい。

2022年度までの地域連携事業を通じて大学と上土町との協働は定着してきたが、新たにまちづくりに参画していない若手の経営者を対象にすることで、今後のまちづくりがさらに発展するとともに持続的なまちづくりの基盤を確立することができる。また本学学生にとってもまちづくりの先進的なフィールドとなるとともに、高校生を巻き込むことで高大連携にも寄与する。

#### 成果発表の予定

一般を対象としたシンポジウム・公開討論会の実施・上土町関係者を対象とした成果発表会開催

### (2) 活動内容

2023年度は、これまでのまちづくりの取り組みを深化させ、①若者を再び街に呼び戻すまちづくりを推進するとともに、②その取り組みを通じてまちづくりを担う次世代の若手経営者を育て、新たなまちづくり集団を形成するために、若者を核とした上土のまちづくりの推進プロジェクトとして、高校生や大学生が来街する環境づくりと若手経営者がまちづくりに参画するシステムの構築に取り組んだ。

#### ①若者を再び街に呼び戻すまちづくりの推進

「若者を再び街に呼び戻すまちづくりの推進」については、従来まちづくりに関わってきた観光ホスピタリティ学科のゼミナールの取組みに加えて、「地域づくり考房ゆめ」やデパートサミット事業や高校との地域連携事業を支援する「ゆにまる」による取り組みなど全学的な地域連携事業として新たな学習会や企画、商品開発、イベントなどが約20回に亘り実施された。





映画祭

2023年度から「地域づくり考房ゆめ」が学生の地域活動の導入プログラムとして企画している「One Team プロジェクト」に新たに上土での活動を位置付け、本格的に上土のまちづくりに関わることとなった。具体的には、上土町商店街振興組合との共催で、2023年11月25日に「上土で映画を楽しむ会」を開催した。上土劇場を会場として映画「バック・トゥー・ザ・フューチャー」の上映、映画に関するトークイベントなどが70名が参加して行われた。当日は、旧電気館所蔵のポスターを活用した「上土映画思い出のポスター展」及び「懐かしの松本・町並写真展」も開催され、「ゆめ」で活動する学生が多数関わり、上土の関係者と交流することができた。



えびす講

また「地域づくり考房ゆめ」を拠点に活動する、デパートサミット事業や高校との地域連携事業を支援する「ゆにまる」も上土を拠点として、地元の食をアピールする取組として、11月の四柱神社の祭礼である「えびす講」において前年度に引き続き、井上百貨店が信州松本の『ご当地カレー』として商品化した「信州松本カレー」の販売を実施した。さらに飯田OIDE長姫高校や松本看護専門学校、市内の中学校などが、学習活動の一環として上土町を対象としたフィールドワークや調査、研究を実施した。

一方、2023年度には、若者の求めるニーズに対応したサービスや企画についての試験的なプロジェクトとして若者による音楽イベントやコンサートの実施に向けた環境整備を行った。上土劇場や旧電気館





を音楽イベントに活用するために所有者等との協議、イベント実施のための施設整備などが上土商店街振興組合によって進められ、若者が気軽にコンサートなどを行うことが可能となり、試験的なイベントの実施として、12月23日に学生が企画した「上土音楽祭」を開催した。

#### ②次世代の若手経営者による新たなまちづくり集団の形成

「次世代の若手経営者による新たなまちづくり集団の形成」については、これまでまちづくりに関わりが薄かった若手経営者とのコミュニケーションを深めるために、ヒアリング調査を実施した。なお当初計画では、①のイベント等を通じて若手経営者のまちづくりへの参画を図る予定であったが、具体的なイベント等の実施までに至らなかったため次年度以降に実施する予定となっている。特に「松本建築芸術祭」を通じて進める予定であったが、旧市立博物館を中心として「松本建築芸術祭」が開催されたため次年度以降へと持ち越しとなった。

### (3) 成果

2023年度は若者が訪れる街の実現に向けた環境整備が中心となったが、松本大学や市内の学生・生徒が学習や活動の場として上土町を訪れる機会が増加し、それに伴い「カフェあげつち」を拠点とした街の受け入れ体制が構築され、2024年度以降の事業展開に向けて街として組織的な対応が可能となった。特にこれまで学生をはじめとする若者の主な受け入れの窓口となっていた「カフェあげつち」や上土商店街振興組合に加え、上土町会や上土クラブ(老人クラブ)、女性部などの関与が増えたことでより多様な若者と地域の交流を進める体制整備が進んだ。

2023年度の取り組みを踏まえて2024年度には「お城下町のエンタメがおもしろい！」をテーマにした催事として「アートパフォーマンス in お城下町」「お城下町シネマエンタメフェスティバル」「第27回松本演劇祭」など、上土を「エンタのまち」として位置付けた事業が予定されており、2024年度以降具体的な取り組みが進展することが期待される。

若手経営者のまちづくりの関与についてはヒアリングなどを通じたネットワークの構築にとどまったが、きっかけづくりとしては一定の成果があり、今後ネットワークをさらに深めつつ若手経営者がまちづくりに関与できる具体的な事業を実施していきたい。

### (4) 共同活動者

畑井治文(総合経営学部観光ホスピタリティ学科)

### (5) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

- ・2024年度の取り組みとあわせて年度末に報告会を開催予定
- ・2024年度の取り組みを含め2024年度に報告書を作成予定

## 4. 地域主導型構想による地域支援事業に関する商品(=生活支援)開発研究

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 尻無浜博幸

### (1) 活動計画

地域支援事業とは介護保険制度上の事業であり、平成26年制度改正によって平成27年度から全国で施行されている事業である。社会保障による身体(個人)支援から生活(地域)支援への移行であり、地域共生社会づくり(社会福祉法)と相まってすすめられている。松本市においてもこの事業の受け皿となる主体が地域の自治組織や住民に求められているものの十分に機能していない実態が依然としてある。本取組は4年目を迎え引き続いて松本市35地区を基盤とした生活支援整備体制(介護保険法)を構築することを目標に、具体的には、「コミュニティ商店(=地域運営法人)」化構想をもって実証研究するものである。従来松本市では主に行政寄りの町会や地区の緩やかな協議体が中心になって対応してきたが、そこにもう一つの機能を付加する形で「コミュニティ商店(=地域運営法人)」化を目指す。そこで扱う商品は、生活支援に特化した有料化し、コミュニティのつながりの中から生活支援範囲の有効な商品(例えば、ゴミ出し、雪かき等)を開発する機能的な主体を明らかにする。これまで松本市庄内地区でモデル的に「もずみ商店」が存在していた。今年度は全市的な広がりを探る。また別の行政機関(具体的には下諏訪町)での展開を試みる。これまで15年にわたり地域福祉行政、町会などの自治組織に関わったネットワークを活かし、新しい主体

の構築によって地元の地域貢献になることを目論んでいる。また、介護保険制度においても本事業が大きな課題になっていることから全国に通用する事業を本研究では目指す。

・共同活動者がいる場合その役割

1. 下諏訪町社協：「ご近所の環」事業にみる、人材確保の取組みから住民の関心度を図る。
2. 松本市放光寺町会：2020年度から移動支援に係る実証実験を共同で積み重ねてきているため、主に商品(外出支援仕組)開発の観点でその後の展開、住民意識の変化等調査対象町会とする。

## (2) 活動内容

本活動は、介護保険法の地域支援事業、社会福祉法の地域共生社会構築の動向を踏まえ、地域の暮らしを守るため地域で暮らす人々が中心となって形成するコミュニティ組織を目論みながら生活機能(生活支援サービス)を支える活動を主眼として取り組んできている。そこに新たに商品性をうたい、コミュニティ商店として実体化させ、ニューコミュニティ構築に傾斜した取り組みである。



### ①地域の実態把握として松本市と下諏訪町の地域支援事業に関わる

松本市生活支援整備体制委員会、下諏訪町生活支援体制整備推進委員会の委員職(行政)を活用して住民の生活支援ニーズを把握、それに必要なメニュー(事業)の開発、実施に向けた検討を行った。特に松本市では35地区中全地区において地区生活支援員(第二層)が新規に配置されたため生活支援員の働きをヒアリングすることで住民ニーズを把握した。派生したニーズ把握のためさらに1地区において、地域包括支援センターの地域支援コーディネーター(第一層)と地域づくりセンター長とのヒアリングを行った(島内地区)。

下諏訪町においては「ご近所の輪づくり」事業を中心に集約される住民ニーズの分析を行った(アンケート実施)。

### ②商品開発として新タイプの活動展開を図る

新タイプの活動とは、松本市白板地区放光寺町会のタクシーを活用した移動支援「お互いさまタクシー」である。“地域公共交通”の取組みと位置づけ、地域公共共通活性化再生法を視野に入れ全市的展開を目論んだ活動(学習会の実施等)である。従来は福祉制度内での取組であったが電車、バス、少量移送と地域公共交通の枠組みを形成、その流れでの取組である。このモデルを全市的に展開する松本地域移動支援推進協議会を組織し定期的に研修会を開いた。そこから得られた情報等冊子にまとめた。

<p>「地域の移動支援に関する学習会」とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 目的 地域住民が各地区の取り組み、交通政策や制度を学習し、情報交流を通して、松本市の移動支援を推進していくこと、地域の特性に応じた利用しやすい移動手段の創出</li> <li>▶ 内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・周辺地区の取り組みと課題</li> <li>・行政機関が取り組む公共交通機関の現状</li> <li>・地域を取り巻く各機関の取り組み 等</li> </ul> </li> </ul> 	<p>学習会の効果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・広報 学習会を通して地域の移動支援を松本市全域の活動に</li> <li>・情報収集 周辺地域・県外の活動、制度を学び、改善</li> <li>・行政等への要望伝達機会 現状の公共交通機関の利便性 資金確保 地域住民の声を直接届ける</li> </ul>  <table border="1" data-bbox="1098 1527 1401 1601"> <tr> <td>行政</td> <td>利用者少→必要ない→本数減</td> </tr> <tr> <td>住民</td> <td>本数減→利用しにくい→利用減</td> </tr> </table> <p>1日1往復で公共交通があるという認識の行政</p>	行政	利用者少→必要ない→本数減	住民	本数減→利用しにくい→利用減
行政	利用者少→必要ない→本数減				
住民	本数減→利用しにくい→利用減				

## (3) 成果

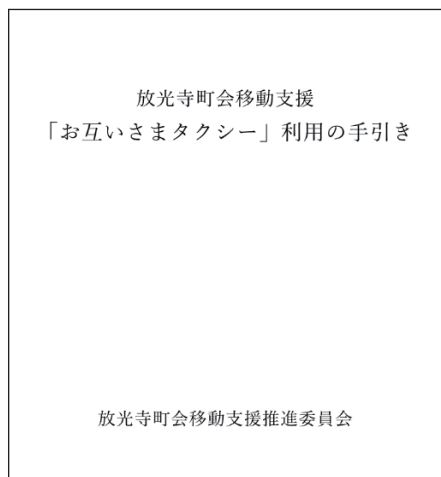
### ①に関連した成果

介護保険制度において各保険者(市町村)は生活支援整備体制事業として取り組む必要があるため明らかになった住民ニーズは受け止める体制が整っている理由から関係者で共有することはできた。松本市の場合は、自治組織単位で町会や地区の緩やかな協議体を中心に担っているため課題の把握は容易だが商品性開発に繋がりにくいことが分かった。その分、下諏訪町の場合は、町社協が事業主体になっているためネットワークを活用して商品性開発に繋がりがやすい比較検討ができた。松本市庄内地区でモデル的に「もずみ商店」(個人)が既に存在しており今期全市的な広がりを探したが4年続きでコロナ禍において進展は図られなかった。

## ②に関連した成果

松本市白板地区放光寺町会のタクシーを活用した移動支援「お互いさまタクシー」は、2021年3月1ヶ月間と2021年4月～1年間の実証実験を基に2022年4月～本格稼働の計画を立て今年度成果を見る。主に全市対象にアンケート調査を実施し、その結果を踏まえ課題を整理した(\*1=一部以下の手引きとしてまとめた)。4年間の取組みを通じてそれを松本市全地区に「放光寺町会モデルアプローチ」として広め取組みを定義するに至っている。いかに浸透するかを今後見通す予定である(\*2=その成果を紹介したもの)。

\*1



\*2



## (4) 共同活動者

- ① 下諏訪町協
- ② 松本市放光寺町会

## (5) 成果の公表

1. 2024年3月21日(木) 「地域の移動支援に関する学習会」を企画、50人の参加を得て開催した。そこで、上記、放光寺町会に加え、島内地区の地域主導型公共交通事業補助金を活用した島内川東乗合タクシーと島立買い物乗合タクシーについて事前調査しこの席上にて素材提供を行った。
2. 2024年2月29日(木) 松本市高齢者支援/地区生活支援員のための松本市白板地区放光寺町会「お互いさまタクシー」事業分析を令和5年度松本市生活支援整備委員会にて紹介する。

## 5. 中部山岳国立公園南部地域におけるトレイル利用のためのプログラム開発

総合経営学部観光ホスピタリティ学科 中澤 朋代

### (1) 活動計画

#### 〈課題意識〉

現在、中部山岳国立公園南部地域において「松本高山Big Bridge構想」による地域のブランド化が進められている。松本駅から高山駅を結ぶ様々なルートを、様々な交通手段で楽しむ旅のスタイルを発信しようとする構想及び計画は、2020年より環境省が中心となり、自治体や観光協会等による広域の官民連携のもとに進められてきた。このエリアは中山間地が多く少子高齢化が顕著に進んでおり、農林業から観光産業へのシフトが進んできた。中部縦貫自動車道の計画は有名観光地へのみの訪問を加速化させる可能性があり、今のうちに観光による恩恵が各集落にもたらされる仕組みづくりを行っておくことは当該地域にとって重要な課題である。

アフターコロナ、ウィズコロナの新たな地域観光は、主体的な楽しみに対して旅行者のニーズが高まっている。こうした市場調査を踏まえて、松本高山Big Bridge構想では、歩く、自転車で漕ぐ、公共交通を使うなど環境に配慮された移動手段とし、見る、話す、体験することを自由に組み合わせる体験型観光を



提供できるよう、各セクターが検討している。また、国内外の市場調査から、本エリアにおける主なターゲットは20～30代の若者で、ウェルネス、アドベンチャーをテーマにプログラム開発の議論が進んでおり、Eバイクの利用やロングトレイルのルート開発が始まっている。本研究室でも2022年に乗鞍岳におけるEバイクツアーの可能性を調査し、12月に飛騨高山学会でその成果を発表する。自転車による両県からの乗鞍岳への乗り入れは夏季限定で人気となってきたが、Eバイクの利用によりツアー対象が広がると同時に、これまでの受け入れの課題は未解決であった。以前の地域の取組みを踏まえ、学生と現地調査をしたところ、若者にとって魅力で実行可能なプログラムであることが分かった一方で、交通の安全ルールの課題、景観スポットや走行方法などのゲストへの案内が不足していることが明らかとなり、解決の展望を述べたところである。また、ロングトレイルについては、松本駅から新島々駅までの区間を、島内～梓川コースと波田～新村～渚コースの2ルートの計画策定に関わった。

#### 〈進め方〉

そこで、2023年度は乗鞍岳へのエコーライン(長野県側)の安全な自転車利用、また、松本大学周辺がコースに含まれるロングトレイルの具体的なプログラムや、ルール等周知のためのツールの開発を行う。乗鞍岳のスカイライン(岐阜県側)は今年の9月に崩壊し来年度も通行止めの可能性が高いことから、計画には入れない。

1. 乗鞍岳Eバイク(自転車)利用の参加者向け利用マニュアル
2. 乗鞍岳自転車利用の交通安全ルールを検証
3. 魅力的な景観の整理と情報収集
4. ロングトレイル計画ルートの踏破と検証

特に3、4については、地元住民の方々のヒアリング等を行い、学生と地域と一緒に作り上げる作業を進めることで意思疎通を図り、認知不足や利害の対立を防ぐことも考えたい。また、現在の取組みは地域の観光セクターが中心であるが、まちづくり協議会等の地域団体との連携について十分に模索したい。

#### ・ 成果発表の予定

学内発表、飛騨高山学会ほか、報告の機会を模索する。

#### ・ 共同活動者がいる場合その役割

情報提供、資料提供、共同作成、プログラム開発に関するアドバイス、試験運用への協力

### (2) 活動内容

地域における活動やニーズと対応させながら、学生と現地を訪問して実践・研究活動と併せて活動を展開した。

9月4日 アウトキャンパススタディとして乗鞍高原にて調査した(ゼミナール活動)

- 1) 乗鞍観光センター前における乗鞍高原の観光資源に関するヒアリング
- 2) 乗鞍観光センターのEバイクレンタルのガイダンス参与観察
- 3) 乗鞍エコーラインのEバイクによる往復調査、資源調査
- 4) 自転車利用マニュアルに関する聞き取り(ノーススター、山口氏)



図1) レンタルでのガイダンスの様子



図2) 位ヶ原山荘のオーナーと撮影

10月12日 ロングトレイルルート選定委員会に出席

一般社団法人信飛トレイル準備委員会が発足し、次年度に向けて行政と連携したルートの確定と安全・運営対策について協議した。環境省、松本市、高山市、ガイド事業者、旅行会社、ロングトレイル専門家などが出席した。学生1名もオブザーバーとして参加した。

10月23～28日 北アルプスロングトレイルコース検証6日間に学生2名が全日程参加。教員は25～26日の2日間参加し、実際のルートを歩いた。



図3) 平湯峠を関係者と歩く



図4) 全コースを歩いた学生2名

11月4日 MATSUMOTO TRAIL DAY 2023のイベントのトークショーに、学生2名が登壇した。

### (3) 成果

1. 乗鞍岳Eバイク(自転車)利用の参加者向け利用マニュアル、並びに、2. 乗鞍岳自転車利用の交通安全ルールを検証、については、すでに運営者が作成していた利用・安全マニュアルの内容と実際の運用を確認した上で、不足する初心者向けの視点について言及したほか、2023年に起こった大事故について行政及び警察等の情報提供を得て、具体的な課題の検証を行った。その成果は以下に収録した。「山岳エリアでのE-Bike ツアーの安全対策」20T038白澤利基

3. 魅力的な景観の整理と情報収集、については、学生と乗鞍エコーラインをEバイクで往復し、情報及び写真データを得た。若年層にとって魅力があるものの、予算、手軽さ、安全などの点からハードルも高いことが分かり、滞在資源としての優位性をいかに運用につなげるか、との課題が浮き彫りになった。その結果は、「乗鞍高原を持続可能な観光地域へ」20T016太田歩、20T048田中駿、20T077宮澤広武、による文章としてまとめた。

4. ロングトレイル計画ルートの踏破と検証については、松本大学内にKITA ALPS LONGTRAIL同好会を設立し、その活動として地域関係者、学生とともに現地を歩き、コースの難易度や魅力を調査した。学生2名は北アルプスロングトレイル準備委員会が主催するモニターツアーに全日程参加し(4泊5日)、教員もそのうち2日間の行程を同行した。その結果について、学生2名が松本にて行われたロングトレイルの発表イベントに登壇し、その感想を一般市民の前で語った。尚、本項目の調査・活動費は、一般社団法人信飛トレイル準備委員会の関係者によるモデルツアーとして実施されたことや、大学同好会による学生の自主活動として進めたことから、本事業の直接的な予算利用はない。

### (4) 共同活動者

環境省中部山岳国立公園事務所、DMOアルプス山岳郷、のりくら高原観光協会、奥飛騨温泉郷観光協会

### (5) 成果の公表(活動発表・論文執筆等)

- ・「山岳エリアでのE-Bike ツアーの安全対策」20T038白澤利基
- ・「乗鞍高原を持続可能な観光地域へ」20T016太田歩、20T048田中駿、20T077宮澤広武
- ・「若い世代の観光客が自然観光に求めるものー乗鞍高原の事例調査をもとにー」20T020奥原軍、20T023鎌倉萌
- ・MATSUMOTO TRAIL DAY 2023にスルーハイカーとして登壇(信毎メディアガーデン) 20T021奥原陸斗、20T073マーメットダンカン

- ・ 信飛トレイル(松本高山ロングトレイルの名称が2023年に決定)の同準備会議において、中澤朋代がアドバイザーとして参画
- ・ KITA ALPS LONGTRAIL 同好会の活動の様子を Instagram にて発信  
アカウント：MU\_KITAATRIL